
Teitan high school's a love story

グッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T e i t a n h i g h s c h o o l ' s a l o v e s
t o r y

【Nコード】

N 8 0 2 4 D

【作者名】

グッピー

【あらすじ】

ずっと小さい時から一緒だった新一と蘭。歩美が初めて好きになった江戸川コナンこと新一。新一の優しさにひかれていく志保。三人の戦いが今始まる！！題名の意味は帝丹高校の恋愛物語。＊新一と蘭、園子、平次、和葉の基本設定はほとんど同じです。

P r o l o g u e (前書き)

歩美の一人称です。

P r o l o g u e

私は吉田歩美。帝丹高校一年生なの。今、好きな人がいるんだ。その彼の名前は工藤新一君。結構有名な高校生探偵で、かつこ良くて…。いつも靴箱にいつぱいファンレターが入っているの。

それでね、工藤君には幼なじみがいるんだ。名前は毛利蘭さん。蘭さんは空手部の女王将でとても強いんだ。歩美、こないだ蘭さんに聞いてみたんだ。工藤君のこと、どう思ってますかって。そしたら蘭さんは

「新一とはただの幼なじみだよ。」って言ってたの。歩美はまだチャンスはあるって思ってたんだけど、念のために工藤君にも聞いてみたんだ。そしたら、

「蘭のことをどう思ってるかって？ た、ただのお、幼なじみだよ。」だって。だから歩美は頑張って工藤君の心を手に入れるんだ。

Prologue (後書き)

光彦と元太も出てくる予定です。感想よろしくお願いします。

第1話：First contact（前書き）

いきなりですが新一と歩美達が初めて会った話です。

第1話：First contact

オレと蘭は教室で歩美ちゃん達のことについて蘭に説明していた。

「へえ、歩美ちゃん達とはあの時の潜入捜査の時に知り合ったんだ。」

「

「ああ。あの時はまだ探偵として活躍し始めたばかりだったからアイツらもオレのことは知らなかったんだ。」

「一年前の帝丹高校」

「蘭、一緒に帰ろーぜ。」

「うん。」

プルルル、プルルル

「新一、電話鳴ってるよ?」

「ああ。」

ピッ

「もしもし。」

『おお、工藤君かね?』

「はいそうですが…事件ですか?」

『ああ、すまんが今すぐ警視庁に来てくれないかね?』

「わかりました。今からそちらに行きます。」

ピッ

「また事件?」

「ああ。だから悪いけど今日はひとりで帰ってくれねーか?」

「うん、わかった。でも気を付けてね。」

「ああ、わかってるよ。」

そしてオレは警視庁に急いで行った。

―警視庁―

「こんにちは、高木刑事。」

「こんにちは、工藤君。今日は殺人事件じゃないけど工藤君にやつてもらいたいことがあるから呼んだんだ。」

「ふうん。で、どんな事件何ですか？」

「昨日起こった事件なんだけどね…」

―翌日、帝丹中学校―

「ねえ、知ってる？今日転校生が来るんだって。どんな子かな？」

「僕の予想ではかわいい女の子が来ると思いますよ。」

「じゃーもし男だったらどんな奴が来ると思っただよ？」

「さ、さあ…」

「歩美だったらカッコイイ男の子がいいな。」

「コラー席に着けえ！！」

「あ、先生だ。」

「今日は小林先生が休みだからオレが担任だ。それじゃあまずは転校生から紹介するぞ。入って来い。」

ガラッ

「うわーカッコイイ…」

「じゃあ自己紹介をしてもらおか。」

「イギリスから来た江戸川コナンです。よろしくお願いします。」

「じゃあ江戸川の席は…。おっ、吉田の隣の席が空いてるじゃないか！！それじゃあ江戸川、あのカチューシャしてる女の子の隣に座つてくれないか？」

「わかりました。」

スタスタ

「あ、あの…」

「あ、これからよろしくな、吉田さん。」

「う、うん。あ、私のこと、歩美って呼んでいいよ。だから江戸川君のことをコナン君って呼んでいい？」

「わかった。」

「ありがとう。」

第1話：First contact（後書き）

感想よろしくお願いします。

第2話：自己紹介

休み時間、コナンの周りに人がたくさん集まった。

「ねーねー、江戸川君ってイギリスから来たんだよね？」

「ああ。」

「イギリスってどんなところなの？」

「結構いいところだよ。」

「そうなんだ。」

「他にはアメリカにも行ったことあるなー。」

「へー江戸川君って結構金持ちなんだー。」

「まあな。」

「でも何で日本に帰ってきたんだ？」

「親父の仕事の都合で帰ってきたんだよ。」

「すごいですね。」

「あー、一回外国に行ってみてーなー。」

「無理だよ、元太君。金持ちじゃないや。」

「そうですよ。それと英語もしゃべれなきゃ外国行っても困るだけですよ。」

「それよりもさ、何でコナン君はそんな名前なの？」

「それは…」

「江戸川君のお父さんがコナン・ドイルのファンで江戸川君はイギリス生まれ。だからお父さんが江戸川君に氣遣ってコナンって名前にしたって所かしら？」

「あ、哀ちゃん!!」

「おまえ、どうしてここに…」

「あら、朝阿笠博士から聞かなかったの？」

「んなもの聞いてねーよ…」

「博士もボケて来たのかしらね。」

「ねえ哀ちゃんとコナン君って知り合いなの？」

「まーな。とにかく後で屋上に来いよ。いろいろ聞きてーことがあるしな。」

「わかったわ。」

「そういえばオレ達自己紹介したか？」

「してないですよ。」

「んじゃあオレからな！！オレの名前は小嶋元太。オレん家は酒屋をやってんだぜ！！よろしくな。」

「僕は円谷光彦です。よろしくお願いします。」

「私は吉田歩美。よろしくね。コナン君はもう知ってると思うけど、この子は灰原哀ちゃん。」

「とりあえずよろしく。」

（相変わらずかわいくねー奴…）

第2話：自己紹介（後書き）

感想よろしくお願いします。

第3話：屋上で

「で、何でオメーがいるんだよ！！アメリカにいたんじゃねーのかよ！！」

ここは屋上。コナンと哀はお弁当を食べながら話していた。

「いたことはいたわ。でも一週間前に帰ってきたのよ。お姉ちゃんにも会いたかったしね。」

灰原哀こと宮野志保は幼い頃に両親をなくし、姉の明美と二人で暮らしていた。しかし志保は明美よりも頭が良かったので小学生の時に明美から留学を進められ、アメリカに留学していたのだ。

ちなみに父親と阿笠博士の仲がよかったのでまだ父親がいるときに一緒に阿笠博士に会いに行ったこともある。そこで新一と出会ったのだ。

「でも何でわざわざ高校に行かずに帝丹中にいるんだ？」

「一回でもいいからこっちの学校に通いたかった。からじゃダメかしら？阿笠博士に頼んだら行かせてくれたわ。一ヶ月間ね。」

「それより明美さんは元気だったのか？」

「ええ。こないだ会いに行ったら元気になっていたわ。」

「よかったじゃねーか。」

「ええ。」

「んで、今はどこに住んでるんだ？」

「お姉ちゃんが住んでるマンションよ。」

「んじゃあ一ヶ月間中学校に行ったらどうするつもりなんだ？」

「とりあえず高校に行こうかしら。確か編入テストで受かったら学校に行けるんでしょ？」

「あ、ああ。」

「なら、ここの中学校に居る間に決めておくわ。それでいいでしょ？」

「ああ。」

「私、お弁当食べ終わったから先に教室に帰るわね。」

哀はお弁当をしまつと教室に帰っていった。

（性格はあんまり変わってねーみたいだな。まあ変わっていても不気味だけだな…）

コナンはそう思いながらペットボトルのお茶を飲んだ。

第3話：屋上で（後書き）

感想よろしくお願いします。

第4話：休み時間が終わる前に…

一方教室には歩美、元太、光彦の三人がいた。

「そういえば次の時間、音楽でしたよね？」

「うん。そうだよ。」

「何かあったか？」

「たぶん何もなかったと思うよ。」

「それにしてもコナン君、帰ってくるのが遅いですね。」

「そうだね。もう哀ちゃんとはとくに帰ってきてるのに…」

「まさかアイツさばるつもりなんじゃねーか？」

「まさかあ…コナン君はそんなことするようない人じゃないと思うけど…」

「ありえますね。まだ時間はありますので一回屋上に行ってみましょう！！」

「おお！！」

そう言っただけで光彦と元太は屋上へ走って行った。

「ちよつと二人とも、待ってよー！！！」

「屋上」

『今日聞き込みしてわかったことはね、犯人は柵を乗り越えて学校の中に入ってきたみたいだよ。』

「なるほど…で他は何かわかったことはありましたか？」

『んー今のところは…』

「そうですか。ではまた何かわかったら電話を…」

『ああ、わかってるよ。工藤君も頑張ってるね。』

「はい。では…」

「ボタン」

「コナン君、見つけましたよ！！音楽の授業、さばるつもりですね」

「!!」

「別にさぼるつもりはねーよ。昨日夜が遅かったからさ、寝ていたんだ。」

「とにかく急がないと遅刻しちゃうよ!!」

「あ、ああ……」

コナン達は急いで屋上から降りていった。

「そっいえば、次の時間は音楽だったよな……?」

「うん、そうだよ。」

「（音楽の先生ってもしかして……松本先生なのか?）」
そしてコナンの悪い予感は当たった……。

「（やっぱりあの先生だったのか!!）」

「あら、江戸川君って工藤君に似てるわね……。」

「（最悪だ……）」

第4話：休み時間が終わる前に…（後書き）

評価、感想よろしくお願いします。

第5話：つかの間の休息

午後六時半、コナンこと新一は家に帰ってきた。

「ただいまー（って言っても誰もいねーか…）」

「おかえり、新一。」

「ら、蘭！？どうしてここにいるんだ？おっちゃんは？」

「お父さんなら麻雀よ。だから今日は一人なんだ。でも一人でごはん食べるのはいやだから新一の家に来ちゃったの。中学校行つたに感想も聞きたいしね。」

「ふーん。」

「とにかく早く着替えてきてね。ごはんはもうすぐできるから。」
「ああ。」

「いただきます」

「どうぞ。」

「やっぱりうめーな、蘭の料理は。」

「ありがとう、新一。それよりもどうだったの？久しぶりに行った中学校は。」

「授業はつまんなかったけど、結構楽しかったぜ。久しぶりに部活でサッカーできたしな。でもやっぱり音楽の授業はつまらなかったよ。松本先生だったからな。まあ何でオレをタクトでたたかれたわけがわかったからよかったけどな。どうやら先生の彼氏がオレに似ているからいじめたくなったらしいぜ。」

「へえ……で、事件の方はどうなの？」

「まだ解決しそうにねーな……」

「そうなんだ。そういえば新一は犯人の見当はついてるの？」

「まだわかんねーよ。学校関係者が犯人の可能性が高いってことしか……」

「でも何で学校関係者が犯人の可能性が高いってわかったの？」

「オレも最初は窓ガラスが割られてたから外部犯かなと思ったけど金庫の鍵が壊されてなかったから外部犯に見せかけた犯行ってこととがわかったんだ。」

「そっか、金庫の鍵がどこにあるかを知っていなきゃ、鍵を壊さずにお金をとれないもんね。」

「まあな。ごちそうさま。じゃ、張り込み行ってくるぜ。」

「行つてらっしゃい。気を付けてね。」

「ああ。また明日な。」

「うん。」

そして新一は帝丹中学校に張り込みに行った。

第5話：つかの間の休息（後書き）

評価、感想よろしくお願いします。

第6話：中学生と女子高生の秘密の話（前書き）

今回は結構長めです。

第6話：中学生と女子高生の秘密の話

次の日、コナンが学校に来てみると元太達はコナンの机の前にいた。
「え、少年探偵団!？」

「ええ。昨日怪人二十面相を読んだんです。その怪人二十面相に少年探偵団が出てくるでしょ？それで僕達もやってみたくなっただんです。」

「（は、くだらねー。そんなにひんぱんに事件なんか起こるわけねーのに）」

「やろうよ、コナン君。」

「オレは…」

「たまにはこういうのもやってみたら？気休め程度にはなるかもよ。」

「は、灰原…お前、いつからここに？」

「あら、さっきからいたけど？」

「ねー哀ちゃんもやるよね？」

「別にやってもいいわよ。」

「でも何でいきなり少年探偵団をやりたいって言い出したんだ？オマエら刑事になるのが夢じゃねーだろ？関係ねえじゃねーか。」

「いえ、関係大ありです!!僕は…」

「歩美、女探偵になりたいんだ。」

「ちよつと歩美ちゃ…」

「オレはえーつと…何だっけ？」

「もー元太くんったらー。」

「あの…二人とも…？」

「つてことでコナン君も入ってくれるよね？」

「ここまで言われたら入るしかない。」

「わーったよ。入ればーいいんだろ、入れば。」

「うん。ありがとう、コナン君!!」

「あなたって本当に探偵好きなのね。小学生の時からやっていたそうじゃない。探偵ごっこ。」

「何だよ、いきなり…」

「小学校1年生の時、博士や彼女と一緒に謎の男からの暗号解いたんでしょ？」

「ああ、そうだけど…って何でオメーがそんなことまで知ってたんだよ！！」

「阿笠博士から聞いたから…」

「あ、そう。」

「それよりこれからどうします？」

「そうだよー。」

「悪い。オレ、トイレ行つてくつから。」

そう言つてコナンは教室を出て行つた。

「ねえ、ここはどうかしら？」

「どこどこ？」

「早く教えるよ、灰原ア。」

「そうですよ。」

「じゃあ江戸川君には言つたらだめよ。」

「何で？」「江戸川君が驚いて私達を止めるからよ。」

「そっかー。」

「じゃあ言つわよ。そこは…」

帝丹高校

一方帝丹高校では蘭と園子が教室でお弁当食べながら話していた。

「へえー新一君、順調良く捜査進んでるんだ。」

「うん。もう少ししたら犯人捕まえられそうだって言ってたよ。」

「でもさー、アイツの潜入先って帝丹中学でしょ？松本先生がいるんじゃないの？」

「大丈夫だったみたいよ。」

「ふうん…あ、そうだ！！ねえ、蘭。私がつたラブラブ大作戦、やってみる？」

「ら、ラブラブ大作戦？」

「あんた、新一君のこと好きなんでしょ？だったら何かプレゼントあげたら？お疲れ様の意味で。」

「プレゼントか…」

「アイツ、蘭からのプレゼントだったら喜ぶよ、絶対。」

「本当？」

「ホントだつて。まあ頑張ってみなよ。」

「う、うん…。」

第6話：中学生と女子高生の秘密の話（後書き）

評価、感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8024d/>

Teitan high school's a love story

2010年11月26日13時53分発行